

歳以上の85頭のうち84頭が最低1度は飲みきた。しかし、呈示を反復するうちに、リーダー・メスガシラを含む9歳以上の年長個体は、摂取量を著しく減少させていった。いっぽう、1～3歳の多くは、何回呈示しても回避を学習するには至らなかった。液体の飲み口のまわりには常に数頭のサルが群がっており、そうした、摂取を促進するような社会的刺激が、年少個体の回避行動を妨げたのではないかと考えられる。

これとは別に、集団ケージ内で飼育されている2歳前後の小集団(6頭)における毒物回避行動の伝播の有無を検討した。まず、小集団の全個体が食べるような食物を選び、最も優位な個体1頭に対して、それを完全に食べなくなるように食物嫌悪条件づけを行った。再度ケージ内に同じ食物が与えられたとき、最優位個体のみはそれを回避したが、他の5頭はなんら躊躇せず食べ続けた。

(1)、(2)を通じ、安全な食物を食べ始める行動については社会的要因の影響が顕著に示されたが、有毒食物を避ける行動についてはそのような影響を示唆する結果は得られなかった。

現代人の骨盤計測値における性差の集団間変異

今村 薫(京大・理)

性差そのものが、集団によって異なる可能性がHanihara(1978)の研究等から示唆されているが、統計的に検証されてはいない。本研究は、性差の集団差の有無を統計的に明示し、性差の集団間変異について考察を加えることを目的としたものである。

資料として、京都大学解剖学教室所蔵近畿人(男性80, 女性40)、長崎大学解剖学教室所蔵九州人(男性40, 女性70)、近畿大学解剖学教室所蔵インド人(男性88, 女性44)の寛骨および仙骨を用い、41項目の計測値について検討した。

1) 要因判別分析により、性差、集団差、性差の集団差を検定した。性差は3集団とも有意差があり、集団間の距離も3集団の間で有意差がある。しかし、性差の集団差では日本人の2集団間には有意差はなく、この2集団の各々とインド人との間には有意差が見られた。

2) それぞれの集団内における計測項目ごとの性差を、集団間で比較するため、性差の偏差折線

を描くと、近畿人と九州人はパターンが同じだが、インド人とは異なる。

3) 男性が有意に大きい計測項目、女性が有意に大きい計測項目を選びだし、それぞれの計測値に重みづけの係数をかけて合計し、男性的スコア、女性的スコアを算出した。インド人は、日本人2集団とスコアの大きさにおいて分離され、日本人2集団のうち、近畿人は女性的スコアにより性差がみられ、九州人は男性的スコアに性差が現われる。

以上のことから、性をわける要因と、集団を特徴づける要因は、必ずしも独立ではないことが明らかにされた。

霊長類の比較内分泌学的研究

鳥居隆三(滋賀医大)

類人猿のチンパンジーから、原猿類のガラゴに至る23種のサル類について、血糖値とインスリン値の測定を行った。その結果、血糖値は、マーモセット科において119～264 mg/dl、リスザルで163 mg/dlと、他のサル類の80～100 mg/dlに比べ高値がみられた。一方、血中のインスリン(IRI)値は、他のサル類に比較して低値を示した。別に行ったマーモセット科の実験の中で、経口糖負荷試験において、IRI値の増加が認められず、さらに、インスリン分泌刺激試験においても何ら増加が認められないことを見出した。そこで、動物種差に伴うインスリン構造の相違が考えられたため、マーモセットおよび比較のニホンザルの脾臓の酸-アルコール抽出物につき、モルモット腎の100,000g沈澱をレセプターとして用いたRRA系およびヒトインスリン抗体を用いたRIA系にて、displacement curveを作成した。その結果、ヒト、ブタインスリンに対し、マーモセットおよびニホンザルの抽出物は、いずれも同様の傾きをもつカーブを示した。これらのことから、マーモセットのインスリンは、構造上ニホンザル、ヒト、ブタと大きな差はなく、ヒトのインスリン測定系(RIA系)にて測定され得ることが分った。この結果、マーモセット類は、高血糖、低インスリン値、およびインスリン分泌刺激に対する感受性の低下を示す、特有の脾内分泌機能をもつことが推測された。しかしながら、これらマ

一モセット類は通常生活において何ら異常を認めないことから、糖代謝についても今後十分な検討を必要とすると考えられる。

正中矢状断面からみたマカク類頭蓋の性差および種間差

— fascicularis group に関して—

安井金也(京大・理)

マカク属の中で、資料が比較的多く得られた、*fascicularis* group (Fooden, 1976) について矢状断輪郭におけるアロメトリー分析を行った。また、新たにヤクザルを含め、同グループ内での形態的位置付けを試みた。

アロメトリー分析においては、独立変数に矢状断面面積、従属変数に、その図心から各輪郭への半径長を用いた。グループ内全種で、共通に認められるのは、鼻骨の陥凹部(側面観による)が、負のアロメトリーかそれに近い群内変異を示し、梨状口上部周辺は、逆に正のアロメトリーかそれに近い変異を示す。それに対し、基底部は、大きさに関係する変異を示さない。雄だけに特異的にみられるものとして、骨口蓋の正のアロメトリーがあげられる。項面は、正のアロメトリーを示すもの、アカゲ雄^{*}、カニクイ雌^{*}、ニホン雌^{*}、タイワン雌と、負のもの、カニクイ雄、ヤク雄、アカゲ雌、ヤク雌の2つのタイプが認められる。頭頂骨後部でも、同様に、カニクイ雌雄^{*}で正、ニホン雌雄^{*}、アカゲ雄^{*}は負のアロメトリーである。前頭骨は、ニホンザルを除き、負のアロメトリーかそれに近いものであるが、ニホンザルは逆に、正の傾向を示す。眼窩上隆起は、雌で正のアロメトリーを示す傾向があり、雄ではイソメトリックである。このグループで、ニホン、ヤクザルの両雄は、アロメトリックな変異が少なく、イソメトリックな群内変異をもつと考えられる。

ヤクザルの形態的位置は、輪郭の形態距離において、ニホンザルに最も近く、それは、雄で他の種間距離平均の約60%である。これに近いのは、タイワン・カニクイの値である。雌は、ヤク、ニホンザルが他の3種と分かれるが、両群の距離は他の3種間の距離と変わらない。大きさは、ニホンザルより明らかに小さく、雄はタイワン、雌はアカゲに近い。ニホンザルとの平均図形の比較で

は、雌雄とも、前後径が有意に短い。

(*:有意)

サルにおける主として消化器系ズノーシスの病原学的並びに血清学的研究

金城俊夫(岐阜大・農)

最近、ヒトの腸炎あるいは食中毒の起因菌として注目されてきたカンピロバクター及びエルシニアを中心に消化器系人畜共通伝染病の病原体についてサルの保菌状況を調査した。

調査したサルは屋内ケージ飼育のもの延べ320頭及び野外放飼場で群飼育のもの延べ177頭、総計497頭で、その新鮮排泄便を供試した。

その結果、カンピロバクターが39頭7.8%から分離された。分離率は下痢便19.6%、軟便15.7%及び正常便4.5%であった。39頭中27頭から *C. jejuni* が、残り12頭から *C. coli* が分離された。特に頑固に下痢あるいは軟便が持続する個体から *C. coli* が長期間分離されたことは、本菌種のヒト腸炎起病性を考える上にも興味ある成績である〔第97回日獣学会(1984)発表〕。

エルシニア属菌は32頭6.4%から分離された。分離率は便の性状とは関係なかったが、屋内ケージ飼育サルで0.9%に対し野外飼育サルでは16.4%と高率であった。菌種別の分離率は *Y. kristensenii* 3.6%, *Y. frederiksenii* 1.6%, *Y. enterocolitica* 1.0%, *Y. intermedia* 0.8%及び *Y. pseudotuberculosis* 0.4%の順であった。ヒトに対し病原性が示唆されている *Y. enterocolitica* 0:6,30 B:1及び *Y. pseudotuberculosis* III型菌が僅かながら正常便から分離された。しかし、サルモネラ及び赤痢菌は全く検出されなかった〔第98回日獣学会(1984)発表〕。

一方、某野猿公苑で感染症と思われる疾病の小流行があり、その死亡サルのウイルス学的検索を行ったところ、SV40を分離した。本ウイルスが流行の原因であるかの確認はできなかった。しかし分離ウイルスに対する免疫粘着赤血球凝集反応による抗体調査では、該猿苑の8頭は100%陽性(平均抗体価210)で、他の7群81頭でも76%が陽性(平均抗体価89.9)であり、SV40の不顕性感染がサルの間を高率にあることが示唆された。